



## 石井邸で撮影した人物写真

石井行昌撮影写真資料の No.383～610 は、主として人物写真です。家族写真も含まれますが、誰を写したのかわからない写真が数多くあります。撮影場所は屋内のものもありますが、屋外のもものが大半です。人物の背景に注目すると、板塀、土塀、扉、庭の前で写しているものが多く、他の写真と比較するとその場所が石井邸であると言えそうです。

人物の姿勢は、立ち姿、椅子に腰かけた姿のものが多く、正装をして、かしこまった表情で写るものがほとんどです。おそらく、石井氏の近所の人や親戚の人ではないでしょうか。石井行昌氏が写真を撮り始めた明治時代の後期は、写真はまだまだ特別なもので、写真館に行って撮る時代でした。写真を撮ってもらおうのも初めての人が多かったのかもしれません。

[京都市立芸術大学の芸術資料館](#)のホームページに、1885年(明治 28)当時の学校の制服を着た人物の写真が載ってい

まず。芸術資料館に尋ねたところ、写真の裏面に「明治 28 年 5 月、京都市立美術工芸学校絵画科二年生、戸島弥一郎、14 歳」と記されているとのことでした。この人物は後に漆芸家となった戸島光孚（こうふ）です。写真の背景を見ると、土の地面で椅子に腰かけていて、背後には板扉が見えます。同じ板扉が、石井写真の [No.444](#)、[No.577](#) などに見えることから、戸島弥一郎の写真は石井邸で撮られたものと言えます。当時、京都市立美術工芸学校は京都御苑の南東端にあり、御苑の北西に隣接する石井邸とはそんなに離れていませんでした。



[No.444](#) 「人物(青年)」

石井邸では、いろいろな人が被写体となり、写真を体験しました。例えば、子をとろ遊びをする子供たち([No.508](#))、シルクハットを手にする和服姿の男性([No.530](#))、洋傘を持つ洋装の若い女性([No.567](#))、ヴァイオリンを弾く男性([No.649](#))の写真等があります。

おそらく、上手く印画のできた 1 枚を台紙に貼り付けて本

人に渡し、ガラス原板は石井氏の手元に残しておいたもの  
と思われます。



No.530「人物(男性)」



[No.567「人物\(女性\)」](#)

(写真資料から 92 資料課 大塚活美)

(2018年12月17日公開)